

はなくらべしきのことぶき まんざい さぎむすめ
花競四季寿 万歳 鷺娘

〔解説〕

「花競四季寿」は、文化六（一八〇九）年、大坂御霊神社の芝居にて初演された景事。題名に表される通り、春夏秋冬の構成となっています。春の「萬歳」では正月の門付け芸の賑やかな様子、夏の「海女」は海辺で若い海女がつれない男を思う様、秋の「関寺小町」は百歳の老婆となった小野小町が、華やかなりし往時をしのぶ、侘びしい秋の景を表し、冬の「鷺娘」では、雪景色の中、鷺の精が春を待つ心で樂しげに舞う様を描きます。

萬歳とは、新年に家々を訪れて祝言を述べ、舞を演じる門付け芸及びその芸人のこと。烏帽子に大紋の直垂または素襖姿で扇を持った太夫と、大黒頭巾にたっつけ姿で鼓を持つ才蔵の二人一組で演じました。太夫と才蔵が新年を祝し、鼓を打ちながらにぎやかに町を行く様を描いた、おめでたい演目です。また、「鷺娘」も、長唄の「鷺娘」とは異なり、明るい内容となっているのが特徴です。

万歳

先づ初春のあしたには、門に松立て、寿を祝ふ熨斗目やのし昆布、千代とゆづり葉あざやかに、告げて行くらん鶯の、声ものどけき春の空。実に九重の賑々と、いつまで尽きぬ竹本の、その一節の世をこめて、幾万歳と祝ひける。

徳若に御万歳と御代も栄へまします。愛敬ありける新玉の、年立ち返るあしたより、水も若やぎ木の芽も咲き栄へけるは、誠に目出たふ候ひける。京の司は関白殿、おりいの御門、日の本内裏、王は十善神は九善。万安々うらやすが木の本に、正月三日寅の一天に誕生まします若戎。商ひ神と祝はれ給ふ。商ひ繁昌と守らせ給ふは誠に目出度ふ候ひける。八瀬女八瀬女、京の町のやしよめ、売つたる物は何々。大鯛小鯛、鰯の大魚、鮑さゞひ、蛤子蛤子、蛤々、蛤見さひなど売つたる物はやしよめ。そこを打ちすぎ側の棚見たれば、金襴緞子、緋紗綾緋縮緬、縺子緋縺子縞縺子縺珍。色々結構に飾り立てゝ候ひしが、町々の小娘やお年の寄りし姥達まで、売り買ふ有様は、実にも納まる御代なれ時なれ。恵方の御蔵にずつしりく、ずつしりくずし、宝も納まる。門には門松、背戸には背戸松。そつちもこつちも幾年の御祝ひと、御代ぞ目出たき。

鷺娘

しのぶ山、口説の種の恋風が吹けども傘に雪もつて積る思ひはなほも幾重か重なる思ひ。ちらす外山の雪をく
ゆらす炭竈に冬籠りせし一枝を、春待ち顔に初花の咲きかけんとやちらくくと、梢に宿る白鷺が霜毛をぬいで羽
たとき、雪は花より花多き六つの花びらちらりく、袂かざしてしをらしや。白雪のくはらへどく降り積
る、花と見紛ふ雪や氷を見ながらも、袖をかざして立寄れば、それは木々の花、切りくべて楽しまん、酒にいざ
やあそぶらん。四季目前にありがたや、雨土恵みの、青人草の、雨土恵みの青人草の、尽きせぬながめぞ、楽し
けれ。

さんじゅうさんげんどうむなぎのゆらい

卅三間堂棟由来

〔解 説〕宝暦十年（一七六〇）「祇園女御九重錦（ぎおんにようごこのえにしき）」の外題で大坂豊竹座初演。若竹笛躬、中邑阿契の合作。卅三間堂の由来や横曾根（よこそね）平太郎の話、祇園女御の話に太宰師季仲（すえな）か・源義親の反逆を配した五段構成の時代物でしたが、文政八年（一八二五）、改訂して「卅三間堂棟由来」として上演。今日では柳の精お柳とその息子緑丸との子別れを描いた三段目が度々上演されています。

〔あらすじ〕横曾根平太郎は、熊野に詣でた折りに山中で伐られそうになっている一本の柳を助けます。その柳の精は後に茶屋の娘お柳に身を変え、平太郎と夫婦になり緑丸という子をもうけるのですが、白河法皇の病氣平癒のためとして柳は伐られることになってしまいます。

お柳は法皇の病の元凶となっている前世の髑髏を平太郎に残し、親子の前から去って行くのでした。

伐った柳を都へ運ぼうとするのですが、誰が曳いても微動だにしません。そこへ平太郎が緑丸を連れて現れ、柳の精が我が子との別れを惜しんでいるのだと言い、緑丸に綱を曳かせてくれと頼みます。平太郎が木遣音頭を歌い、緑丸に綱を曳かせると柳は静かに動き出すのでした。

木遣音頭の段

はや東雲の街道筋、木遣囃子で地車の、轟く音ぞ勇
ましや

へ和歌の浦には名所がござる、一に権現、二に玉津
嶋、三に下がり松、四に塩釜よ、ヨイ／＼ヨイトナ
俄かに車地に座り、ゑいや声して人夫ども、押せども
引けども一寸も、先へ行かぬぞ不思議なる。警護の武
士進ノ蔵人しん くらんど

「騒ぐな者ども、思ひ当たることこそあれ、急くな、
と制するところへ身拵えして平太郎、みどりを連れ
て出で迎ひ

「さてこそこの木の動かぬは、目前親子恩愛の、別れ
を惜しむと覚えたり。妻が霊をも諫めるため、何卒綱
をこの俵に、引かさせて給はらばありがたからん」
と願ふにぞ

「ホ、さこそ／＼、某もさは存ずるところ、さやうな
らばこの柳、新宮の浜先まで、後は海手を流さん、イ
ザご用意」

と勧むれば

「ハ、ア忝し」

と一礼述べ、みどりもろとも立ちかゝり、木遣音頭は
父が役、かざす扇もしをれ声

へむざんなるかな稚き者は、母の柳を都へ送る、元は
熊野の柳の露に、育て上げたるそのみどり子が、ヨイ
くヨイトナ

「こりやおれが母様か」

と、綱引き捨て、『わつ』と泣き、縋り嘆けば父親は、

涙に声も枯れ柳、引けば引かるゝ恩愛の『孫よ、く』

と夕べまで、いとしがつたる老母さへ、道の巷に葬ら

んと、かき抱きたる孝の道忠義に厚き蔵人が、諫めて

帰る都の土産つと。柳ななと柳と契りたる、連理返りや楊枝村

女夫坂とて言い伝ふ、棟木の由来因縁を、語り伝えて

いちじるぎ

絵本太功記

〔解 説〕寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段に於てはめて描いています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔局注進の段〕本能寺の変を未だ知らない真柴久吉。備中高松城攻めの最中に、陣笠を付け深手を負った阿野の局が、都から久吉のもとにたどり着きました。異変を察した久吉は、ひとり局と対面し、武智光秀の謀反と尾田春長・春忠の死を知らされました。役目を果たした局は、息絶えました。久吉は、この重大事に味方の動揺を防ぐため、局を曲者に見せかけます。

〔妙心寺の段〕尾田春長を討った武智光秀が陣を構える京の妙心寺。光秀の母・さつきは、主殺しという息子の不忠を許すことができません。光秀が陣所に戻ると、さつきは主君を殺すような息子とは一緒にいられないと、光秀の妻・操や、十次郎の許嫁・初菊が止めるのも聞かず、妙心寺を立ち去ります。夕刻、独りきりになった光

秀の様子を家臣の四天王田島頭と十次郎が密かにうかがっています。光秀が、辞世の句を衝立に書き残し、自害するつもりで刀を手に取りました。田島頭と十次郎は駆け寄り、光秀を押し止めます。主君殺しの罪に悩む光秀は、暴君を殺したのは天誅であるとする田島頭の言葉に迷いを振り切り、都へ向かっている久吉との戦いを二人に命じ、天皇に將軍として任命されるために宮中へ向かうのでした。

局注進の段

なりにける

ぶんりんさんぎ
聞鱗山揮一同して、風雨烈しき中国の、物騒がしき

かわず

蛙が鼻、久吉公の陣館。乱杭高垣幕結い廻し、兵

具ひつしと並べしは、事嚴重に見えにける。またも

聞こゆる陣鐘に、連れて駆け来る女武者、金石きんせきなら

とうおうりようばんば

ねど湯王鏖万葉を乱し都より、夜を日に継いだる

阿野の局

「久吉公にご見参」

と支える組子事ともせず、広庭伝ひ歩み来る

「ヤアく者共、某に逢はんとある女武者、曲者な

りとも何程の事やあらん、対面して取らせんず。者

共引け」

と、御下知の、声聞き取つて阿野の局

「ヤア久吉殿か」

「ア、コレシイ、音高しく。ご自分の形相ぎようそうひと

かたならず。一大事の注進ならば、敵へ漏れては味

方の悲運。心を付けて物語られよ」

と、腹帯しつかと、即座の気付け

「サ様子はいかゞ。なんとく」

「ハアゝされば候、春長公には、安土を出立ましま

して、都本能寺に入らせ給ひ、中国加勢の御手配り、

諸軍を催す時こそあれ、逆臣武智が夜討の企て」

「何、光秀が謀叛とや。シテく勝利は如何にく」

「ハア、明くれば二日子ねの下刻、水さえ音なき真の

闇、はや洛陽に乱れ入る夢驚かす俄にわかの戰場。太刀

よ具足も乏じないしき寺内、数万の敵は甲冑に、身を固め

たる小手膺すねあて当。味方は薄衣綾錦、濃紅こきくれないの玉禪たまだすき、

自ら初め蘭丸兄弟、死地に入つたる働くぎに、庫裏方

丈も忽ちに、血汐隈取る修羅道の、巷ちまたに迷ふ築山

蔭、射つつ射られつ斬つつ斬られつ剣の山、八寒地

獄となる鐘は、五臓を射抜く君の弓勢ゆんせい。先手の軍兵

ひと筋の、髀つのぎに連なる三人五人恐れをなして引き

退く」

「シテく君にはご安泰にてましますか。氣を付け

られよ、阿野の局」

「ハアト」

「君にはご安泰にてましますか。心許もとなし、如何に

く」

「ハア、申すも便びんなきことながら、運の尽きとて

蘭丸殿、田島が手鍵に無念の最期。勝かつに乗つたる光

秀方。味方は残らず討死し、春長公にも御腹召され」

「ムトシテく三法師君は」

「若君様は細川殿へ落とし参らせ」

「春忠公には」

「二条の御所も一時に亡び、火中の煙と失せ給ふ。

これぞ形見お家の御旗。この上は久吉殿の智略にて、

武智を討ち取り亡きわが君の尊靈に、手向けて給べ

や真柴殿」

と、死ぬる今いま際まわの際きわまでも、君を大事と張り詰めし、
心の花もがつくりと折れて散りゆく貞心貞死、義女
の鑑を残しける。始終の大変聞く久吉、突つ立ち上
がり大音声

「ヤア／＼方々。我を謀たほる女かが不敵、只今某斬り
捨てたり」

と、諸軍の心迷わさぬさすが智人の名大将、先立つ
主君亡き人の生死は同じ梓あず弓さ、弔ひ

妙心寺の段

さて逆賊武智光秀、多年の恨み一戦に、春長父子ふしを討ち奉り、妙心寺に砦を構へ、勝ちほこつたる諸軍の勢ひ、ともに威風を顕して、備へ厳しく守りゐる。武智十兵衛光秀、武威轟かす強将の、常に変わりし屈托顔、席を改め詞を正し

「ホ、三人共出迎ひ大儀。シテ母人にはご機嫌よくお渡りなさるか」

「サイナ、先程も田島頭と自らが、わつつ口説いつ、どうやらかうやらお口が和らぎ、母公様とも睦しう「ム、ホそれは重畳出かいたく。さあらば直ぐ様

ご対面」

「イ、ヤ、それには及ばぬ、母が直々参らん」

と、声うちかけを引き換へて、木綿布子に風呂敷包み、背にちよつこり賤しずめの女の、姿見るより驚く人々、操は傍にすり寄つて

「系図正しき武智の御家、殊更四海の武将とも仰がれ給ふ夫光秀。天下の御母公様ともいはるゝ御身が、浅ましきお姿は若しやお心違たがひしか」

と、尋ねに、につこと打笑ひ

「ホ、忝くも清和源氏の嫡流たる武智の系図。元より武勇の家柄なれば、誰れに恥づべき謂れなし。年は寄れども心は鉄石。渴しても盗泉の水を飲まずとは、お身達もよう知つてゐやる筈。心穢れたわが子の傍、片時も座を同じうせんはわが日本ひのちもとの神明しんめいへ、

畏れありく。伯夷叔斉を習ひたゞ雲水に従ふて出で往く母。これがこの世の別れぞ」

と、義強き母も恩愛の涙紛らす有様は、いと哀れぞ増さりける。光秀は黙然と、差俯ひて居たりしが、操の方は涙ながら

「コレ申しわが夫。母様のたゞおひとり、何処を当てと長の旅。なぜお止めなされませぬぞ」

「ホ、不忠不孝との御蔑み、今更申す詫びもなく、せめては母のお心に逆らはぬが寸志の孝。四海の内はこの光秀が掌にある。お止め申すな、そのまゝく」

「ヲ、さすがは悪人ほどあつて根強い魂。チエ、云はん方なき人外め」

と、睨む目許にはらくくと、涙隠して立出づる心の張弓強弓の引きぞ、煩ふ嫁孫の、中に悲しき初菊が

「これなう申し祖母様」

と控へる手先、振り払ひ、見返りもせず出でて往く。

『わっ』と泣き出す人々を、制し留めて

「ヤアく者共。母人の御行方何処までも見届けよ。」

御手道具の用意々々」

と光秀が、鶴のひと声、数多の軍卒、箆筒長持挟箱、その外雑具鉦乗物

「御母公様のお姿を、見失ふな」

と足早に、跡を、慕ふて急ぎ往く。影見送りて光秀は、何か心に打領き

「奥操、倅十次郎、嫁初菊諸共次へ立ちやれ。用事

あらば手を鳴らす」

と、心ありげな詞の端

「アイ」

とは云へど立ち兼ねる

「ヤアぐづく」と何を猶予。早く立てよ」

と決め付けられ、心は跡に残れども親子三人打ち連

れて、是非なく、次へ入相いりあいの鐘が無常を告げ渡る、

実にももの凄き庭の面おも、忍び出でたる四王天『君の様

子はいかゞぞ』と、身をひそめてぞ窺ひみる。それと

は知らぬ光秀が、あり合ふ硯引き寄せて、筆喰ひ締

めし唐紙の、表に何やらさら／＼。かくと見る

より、十次郎瞬きもせず物陰に、守りゐるとも、白しろ

書院じょいん、たゞ一心に書き認めしたた、筆投げ捨てゝむんずと

座し、諸肌くつろげ指添さしぞえを、抜くや玉散る氷の刃、

やゝ打眺め両眼に、はらく／＼涙喰ひしぼり、既にか

うよと見えければ、主従小陰を走り出で

「ヤレ、早まり給ふな父上」

と、取りつく十次郎、四王天、鏡の如き両眼を、くわ

つと見開き声震はし

「コレわが君。コリヤこなた狂気召されたの。今朝14

より始終の様子、心得難く思ふ故、万事心を付くる

某それがし。物陰より窺へば、出かし顔に辞世の一句、『順

逆二門なし。大道心源に徹す。五十五年の夢覚め来

たつて、一元に帰す』とはナ、／＼、／＼、なんの戯言たわごと。

『君臣を見ること塵芥ちりあくたの如くせば、臣君を見ること

怨敵おんてきの如し』と、春長猛威に増長して、神社仏閣を

焼失し、万民の苦しむる暴悪、神明これを誅するに、光秀の御手を以て討たし給ふ。天の与ふるを取らざれば、災ひその身に帰す。左程のことを申さずとも、よくご合点のこなた様、切腹とは馬鹿々々しい。人は知らず、この四王天田島頭、殺す事罷りならぬ」

と居丈高

「ヲ、さうぢやく。父の命は我々始め万卒に至るまで、ご一身に及ぶ御命。臣義を守るとも、君これを補助せざるは、それ将とは申されず。たゞ生害は留まり給ひ、しもほんみん下万民の苦しみを救ひ給へ」

と右、左、涙とともに諫めの詞。光秀はたと横手を打ち

「ハ、誤つたりく。一天の君の御為には、惜しか

らざりしこの命、暫しは存ながらへ事を計らん。先づは綸旨りんしを乞ひ受けて、なほも背かん者共をことごと悉く誅戮りくせん。急ぎこれより我は参内さんだい。汝ら二人は久吉が、都へ上るを半途に待ち受け、たゞ一戦にぼつ返せよ。イデ装束を」

と立ち上がれば、近習小姓きんじゆが心得て運ぶ大紋立鳥帽子だいちもたてえぼし、立派に着なす骨柄はあたり輝くその装ひ、はや15引き出だす栗毛の駒、光秀ゆらりと打乗つて

「ヤアく十次郎。田島頭諸共に西国へ馳はせ向かひ、必ず共に油断なく軍功を顕せよ」

と、詞に、『ハツ』と四王天

「ハ、、、君、ご出陣には及ばずとも、某かの地に向かひなば、猿冠者さるかじやめが素頭すづかぶを、討ち取るしめりは手裏

にあり」

いそふれやつ」

「ア、イヤく、彼も痴^しれ者。定めて遠き計略あら
ん」

と逸散に、大内山へと急ぎ往く

「コハ親人の詞とも覚え。父に代はつて某が、軍
配取つて一戦に、敵の首を実検に備へんコレ、く

くくく気遣ひあるな」

と、勇み進みしわが子の骨柄

「ホ、あつぱれく潔し。我も後より出陣」

と、手綱搔い繰りしとくくく、乗り出す駿足馬上

の達者、轡^{くつわ}の音は秋の野の、虫にはあらでりんく

く

「綸旨をやがて頭に戴き、刃向かふ奴ばら打立て、
追ひ立て斬り散らし、追っ付け四海に羽を伸さん^の。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。